
ダニール・セーヘルスの花綱装飾の着想源を探る——17世紀フランドル花卉画へのイタリアの影響

泉茂美(無所属)

ダニール・セーヘルス(1590-1661)は、イエズス会の平修道士として、花の静物画・花卉画を多数制作した17世紀フランドル花卉画を代表する画家である。室内装飾を目的とした同時代の花卉画が多い中、セーヘルスの花卉画の花には宗教性を感じさせるものがあると発表者は考え、花綱というモチーフに着目した。先行研究においては、セーヘルスが師であるヤン・ブリューゲル1世(1568-1625)の花環作品を発展させ、カルトウーシュ作品を制作していたこと、花環作品の考案者はブリューゲルのパトロンであるミラノの大司教フェデリコ・ポッロメーオ(1564-1631)であることが指摘されている。このため、花綱装飾の着想源はイタリアにあることが推測されるが、セーヘルスの花卉画作品は未だフランドル絵画史において語られるに留まっている。

そこで本発表では、セーヘルスの花環作品・カルトウーシュ作品の花綱装飾の着想源を、15・16世紀のイタリアの古代ブームと花綱装飾の作品に具体的に見出し、ブリューゲルのイタリア滞在とミラノの大司教ポッロメーオを手掛かりに、セーヘルスの花卉画へのイタリアの影響を指摘してみようとするものである。

はじめに、15世紀イタリアの古代ブームとセーヘルスへの影響関係について検討する。古代ブームは1470年代、ローマの「ドムス・アウレア」の発見を1つの契機とし、セーヘルスが制作した《花綱》(ベルギー王立美術館蔵)と古代遺跡の花綱との形状の類似は、ローマ滞在経験のあるセーヘルスが遺跡を実見した可能性を示唆している。また、《花綱》には聖母子に関連する宗教的象徴が付与された花が描かれている。

次にブリューゲルを経由して、セーヘルスがイタリアに触れた可能性について検討する。発表者は、15世紀の画家たちが古代遺跡をスケッチした『エスコリアル宮素描帖』(1480年代)の花綱装飾とブリューゲルが描いたと想定される素描が酷似していることを見出した。おそらくブリューゲルはイタリア滞在中(1589-1596)に古代遺跡を実見しており、その素描がセーヘルスの花綱とも似ていることは、イタリアの花綱の図像が少なくとも師弟間で共有されていたと考えられる。

花環作品の考案者とされるミラノの大司教ポッロメーオは、古代遺物に興味を持ち、風景や自然物は神の創造物の多様性を示すという理念の下、ブリューゲルやカラヴァッジョの作品を蒐集し、ブリューゲルの有力なパトロンでもあった。そして、ポッロメーオはイエズス会の創始者、イグナティウス・デ・ロヨラの影響を強く受けていたことが注目される。

以上を考え合わせると、セーヘルスの花環作品・カルトウーシュ作品の花綱装飾の着想源はイタリアにあり、ブリューゲル、ポッロメーオ、イエズス会のサークルを経由することで、古代の花綱装飾が宗教性を纏いセーヘルスの花卉画へと繋がったと考えられる。